

## 意見陳述書

2012年9月25日

松山地方裁判所民事第2部 御中

原告共同代表

渡部寛志

(福島から避難している農業従事者)

### (1) 私の身に起きた事

原告の渡部寛志と申します。本日は、原告共同代表として、また福島からの避難者として意見を述べさせていただきます。

私は、爆発事故を起こした『東京電力福島第一原子力発電所』の北 12km に位置する南相馬市小高区に生まれ育ちました。そして先祖代々の土地を耕してきた農家です。現在は避難を強いられ、妻と 3 人の子と共に、愛媛県伊予市に避難中です。

私は去年 3 月 11 日、あの巨大な地震を体験し、そして巨大な津波を目にしました。我が家と家族は幸運にも無事でした。しかしあの日から 1 年 6 ヶ月を経た今もなお、元の家で朝を迎えた事はありません。

元の地を離れ、避難が始まったのは福島第一原発が水素爆発した 3 月 12 日です。福島県内の親戚の家を点々とした後、4 月 2 日に大学時代を過ごしたここ愛媛県松山市へと避難先を移しました。福島県外への避難は、『不安と混乱の中にある福島に留まるより、余計な心配をすることのない安全で落ち着いた地で、娘に小学校の入学式を迎えさせたい。』という思いで決めたことです。それでもその頃はまだ「1 ヶ月くらいで帰れるかな?」という淡い期待を抱いていました。

しかし現実には、4 月 22 日、我が家は警戒区域に指定されてしまいました。そして、私は、「道」を見失い、立ち止まることを余儀なくされました。一時は、農民である事を諦めようとも考えました。ですが、その後の原発の状況、政府の被災者への対応を見て思いました。「このまま待っていても私たちが置かれた状況は大きく変わらないかもしれない。それなら、期待して立ち止まっているより明日にむかって歩き出そう。それに東電や国の力によってこれまで代々続いってきた米作りの営みを断ち切られるのは悔しい。私だけでも負けるわけにはいかない。農民である事を諦めず意地を貫こう。」そう思って、7 月に伊予市双海町で農地を借り、8 月には避難先を移し、米づくりを再開させました。

あの 3 月 12 日から 1 年 1 ヶ月後の今年 4 月 16 日、幸いにも私の住んでいた地域は放射線量が低く、避難指示解除準備区域に再編されました。泊まる事、生活をする事は出来ませんが、許可なく立ち入る事は可能となりました。状況は好転しているように見えます。しかし仮に、今後早期に戻ってよいという地域に指定されたとしても、戻るかどうかは自己判断しかありません。そして戻って何が出来るのかを考えた時、農業を職とする私にとって、また 3 人の幼い

子を持つ親としては、簡単に帰るといふ決断は出来ません。今は、福島第一原発の事故が本当に終わり、また放射性物質による汚染が劇的に改善されないかぎり、子どもが高校を卒業するまで愛媛にしようと決めています。

## (2) 福島の苦悩

福島で起こった事は何でしょうか。

それは、一企業の所有する商業用の原子力発電所の事故です。

事故を起こした原発の立地する双葉町には『原子力明るい未来のエネルギー』という標語がメイン通りに大きく掲げられています。これまで、大量の電気を生み、大量の雇用を生み、地域全体の人々の生活の糧となってきた『原発』、誇らしい存在だったはずの『あの原発』は、大量の放射性物質を撒き散らしました。

そして「大きな悲しみ」と「大きな苦しみ」を生み出してしまいました。

「大きな悲しみ」それは多くの「死」です。福島県の震災関連死の数は2012年3月31日現在で761人（復興庁）となっています。これは被災県の中でも最も多い数です。

原発に近い幾つかの病院では、爆発事故直後の混乱の中で、長時間、劣悪な環境におかれた患者が避難移動中また移動後に亡くなりました。避難先でも肉体的・精神的疲労が原因で多くのじいちゃんばあちゃん達が亡くなっています。また自ら命を絶ってしまった9人もこの中に含まれています。この761人の方々は死ぬべくして死んだのでしょうか。いや原発事故さえ起きなければこれほど多くの死者数とはならなかったはずです。国会の原発事故調査委員会は今回の事故を人災と断定しました。ならば多くの人々が人の手によって死に至らしめられたという事になるのではないのでしょうか。

そして「大きな苦しみ」、それはさまよい続ける「避難者」の苦しみであり、汚された大地に生きる福島県民の苦しみです。福島県の避難者数は、今年9月6日現在で福島県内に99521人、福島県外に60042人と集計されています（復興庁）。そしてその多くが原発事故に伴う避難者です。

- ・生きる場を強制的に奪われ、なれない土地で、毎日を送る人々がいます。
- ・自らの生きる場を自ら捨て、自主的に避難する人々がいます。
- ・家族でさえ引き離されバラバラにされてしまった人々が多くいます。

避難者だけではなく、そこに留まって生活を続ける人々の苦悩も計り知れません。

- ・風評被害と闘いつつ、葛藤しながらも、食べ物を作り続ける農民達。
- ・小さい子どもを抱えながら、放射線という見えない恐怖と闘う母親・父親達。

9月14日に発表された福島市のアンケート調査結果によると、34%の住民が「今でも避難したい」と考えているということです。

福島県では2011年3月11日以前の精神状態のまま、これまでと何んら変わる事なく生活を続けているという人はごく少数です。福島県民の多くは、自らの「生きる場」を求めさまよい続け、事故発生から1年6ヶ月が経っても未だに苦しみの中におかれているのです。まだなにも終わっていません。全ては現在進行形です。そして今、福島で起きている事は、すぐそこにある現実なのです。そしてたまたま、そこで起こった出来事というだけです。

### (3) 伊方原発の訴訟によって

原発事故という一つの原因を発端に様々な被害が発生し、様々な問題が生じたのです。住むところ・食べるもの・コミュニティーの崩壊・家族離散・経済的困窮・精神的ストレスの増大など。また同じ被災者・避難者であっても、そのなかで賠償基準や支援対象などの違いにより様々な格差が生じ、心の溝まで生まれています。

私たち被災者・避難者は、かけがえのない多くのものを失ったのです。そして亡くなった多くの人々の無念の思いを背負っているのです。それでも多くの人々は、懸命に前に進もうとしているのです。悲しみと苦しみに耐えながらです。

昨年9月、野田総理大臣は、就任当初の会見でいいました。「福島の再生なくして、日本の再生なし」と、そして「この再生を通じて日本を元気にする」と。私はその言葉に、大きな期待をしました。しかし、未だに解決できない問題が山積みで、再生の道筋すら示されていません。

政府にとってはまだ1年半なのでしょうか。私たちにとっては、取り戻す事の出来ない貴重な1年半なのです。

私が今回の訴訟に加わった理由は、「福島を救いたい」という思いと、「再び同じ過ちを繰り返させるわけにはいかない」という思いがあったからです。

私は、福島県民を救う根本的な方法は、今回の事態の全てを国の責任として福島と向き合わせる事だと考えます。そのためには、原子力政策を誤りだったと認めさせなければならないと思っています。

私はこの裁判を通じて、裁判官だけでなくできるだけ多くの人々に、福島の悲劇を見つめてもらい、また私たちが一体どこでどう間違ったために今の結果が生まれたのか、その真実を受け止めて欲しいと願っています。そして、伊方原発を止める事が実現し、それが全国の原発を止める事に繋がっていき、さらには全ての原発を早急に廃炉に向かわせる事が出来れば、私たち福島県民の現状を打開する事にもつながるはずだと考えています。

### (4) 私たちの願い

愛媛県内にいた、ある避難者は次のように言っていました。

「今は愛媛県に避難していますが、いつも心は福島を向いています。どうしたらこの大事故から立ち上がれるのか、どうすれば大切な友人や子供たちが幸せになるのか、そればかり考えています。愛媛にも原発が存在しています。自分たちの経験を生かし原発問題・放射能汚染等について啓発活動等に関わる事が出来ればと思っています。」と。この方は福島県大熊町で福島第一原発の社員寮の管理人をしていた63才の女性でした。残念ながら半年前にガンで亡くなってしまいましたが、死ぬ間際までこれからの事を憂っていました。またこの人はこうも言っていました「大震災を経験し、たくましく大きく成長している若い人達が、経済的に豊かではなくても、心豊かな幸せな国に方向づけてくれると信じています。」と。

この方の思いは非常に強いものでした。しかしこの思いはこの方だけの特別な思いではありません。私たちは、この現実が生み出されてしまった事に対して、逃れることのできない大きな責任を感じています。そしてこれからの世の中がどうなっていくのかを危惧し、自分自身もこれからをどう生きるべきかを必死に考えています。

「もう二度とこんな過ちを繰り返してはならない。」これは私たち被災者・避難者・福島県民に共通の思いであり、願いです。そして私たちの多くは、原発の存在しない新たな社会を急いで作らなければと確信しています。

私はそのためにはまず、被災者・避難者ではない多くの人々に、福島を自らの住む地域に置き換えて、「自分の身に起こった事」として想像するという努力をしてもらいたいと願っています。もしそれが叶えば、原発の存在自体が間違いであったと気付くはずだからです。

例えばこの愛媛で、マグニチュード9の巨大地震が発生します。そして伊方原発で重要配管が致命的な損傷を受けます。これによって原子炉の冷却機能が失われ、水素爆発を起こします。そして放射性物質が大気中に大量に放出されます。

それを知った瞬間、人々は何を感じ、どんな感覚に落ちいるのでしょうか。何を思い考え、どんな行動をとるのでしょうか。福島第1原発で起きた出来事をここ伊方原発に置き換えてみます。

・伊方の36才2児の母は、爆発音を聞き絶望を感じ「もう終わった」と思います。そして避難移動中吐き気におそわれます。その後は家に戻る事が許されません。

・八幡浜の32才2児の父（原発から12km）は、恐怖を感じ「背筋が凍り付く」感覚を覚えます。そして恐怖から逃げるために必死に走り出します。その後は家に戻れるかどうか分からなくなります。

・大洲の49才の女性（原発から25km）は、混乱し「その事実を疑い」ます。窓を閉め、テレビを見ながら間違いである事を祈ります。そして自治体から自主的な避難を勧められ避難します。その後は自治体から戻るように促され戻ります。

・松山の31才1児の母と32才2児の母（原発から50kmと60km）は、不安を感じ「このままじわじわ死ぬのかな、死ぬならみんなで死にたいな」と思います。子どもへの影響を危惧し、逃げるべきかの判断を迫られます。そして車に乗って新幹線に乗って飛行機に乗って逃げます。

その後は鼻血・腹痛、強い精神的ストレスにさらされながらの日々を強いられます。

・原発に近い住民ほど、家族・親族が事故処理を行なう作業員として現場に赴きます。250ミリシーベルトまでの被曝を許されて。

これは、想像の話ですが嘘ではありません。福島第一原発の立地する双葉町民、原発から12km離れた私自身、原発から25km離れた南相馬市民、原発から50km離れたいわき市民、原発から60km離れた北茨城市民がそれぞれ実際に感じ考え、置かれた状況です。

今月14日発表された「2030年代に原発稼働ゼロ」を目指す新しいエネルギー政策（革新的エネルギー・環境戦略）。これは裏を返せば、2030年代までは原発を稼働させると言う宣言です。なぜ事故の教訓に深く学んだ上での脱原発であるのに、2030年代まで原発を重要電源として活用しようとするのか。その間に万が一のことが起こる可能性があるとは考えないのか。本当にそれで未来の世代に対し責任を果たせると考えているのか。大飯原発を再稼働するときには「国民生活を守るため」とも言っていますが、それは今の日本経済と生活水準を守るという事でしょうか。でもその代わりに未来の国民生活が脅かされる事になってもいいということなのでしょうか。

去年の9月、「福島の再生なくして、日本の再生なし」そして「この再生を通じて日本を元気にする」と言った首相の言葉。私はこれを素直に実行して欲しいと願います。「原発ゼロを出発点とする新しいエネルギー政策」を作り、あらゆる政策資源を投入し、廃炉と放射性廃棄物処

理を進め、「福島の再生」を実現する。そして同時にその政策に則った産業を興し、日本を元気にする。これは不可能な道筋ではないはずだ。

#### (5) 私たちの責任

福島第一原発が爆発した瞬間に失われたもの、それはこれから生まれ出る命でもありました。2011年3月12日、原発から3.5kmの距離で、寝たきりの高齢者を自衛隊のヘリコプターまで搬送していた36才の女性がいました。彼女は、社会福祉協議会の職員であったため避難が遅れました。そして福島第一原発一号機の爆発音を聞くことになりました。爆発音を聞いた約10分後には、黄色く染まった空気がせまり、黄色い牡丹雪のようなものが頭上から舞い降りたそうです。避難の後、3才の双子の子をもつ彼女は、苦悩の末、第三子を望むことを諦めるという決断をしました。

私たちは、私達大人が大地を汚し、子供達の未来に大きな不安をつくり出してしまったこと。私達大人が原発の立地を許し、その存在をずっと認めてきたこと。そして私達大人には逃れる事の出来ない大きな責任があることを、しっかりと認識しなくてはなりません。

そして私たちは、「これからの未来を生きる子供たちに残してやれるもの、子供たちのために守らなくてはならないものは何であるべきか」ということを考え続けなければなりません。少なくとも子や孫に尻拭いをさせてはならない、しっかりと後始末をして死んでいかななくてはならないという思いで、これからの社会を作っていくなくてはなりません。

最後に改めて、絶対に愚かな過ちを繰り返してはならない。そのために伊方原発を動かしてはならない。それは福島を救う事に繋がり。私たちの子孫に対する責任である。ということ強く主張し私の意見とさせていただきます。

以上